

(第五章)

三法（現象）の無我を説く＞界（元素）に法我を否定する＞章の著述を説く＞六元素が本性として成立したことを否定する＞虚空の元素が本性として成立したことを否定する＞虚空の元素において性相と名相を否定する＞事相を否定する＞性相が当てはまることを否定する＞〔前後を考察して性相が当てはまることを否定する〕

ここに言う。「これらは六元素も示した。それらのそれぞれの性相¹も示した。そこで、虚空の性相とは『遮らない』であると示し、事物²が無ければ性相が示されたことも正しくないので、そう見れば、性相がある故に虚空は有る。虚空がある如く、残りの諸元素も自らの性相がある故に、有る。」

説く。虚空の性相は、不合理である。何故かといえば、このように、

虚空の性相（定義）の以前に、
虚空は僅かにも有るのではない。

もし、虚空の性相の以前に、「虚空」というものが僅かに有るならば、それに「この虚空の性相とはこれである。」と、性相が示されることも適うけれど、虚空の性相の以前に虚空は無い。虚空が無ければ、「虚空の性相」というそれが、如何様に合理となろうか。仮に『虚空の性相の以前に、虚空は有る。』と、そのように考えれば、そう見れば、

もし、性相以前に有るならば、
性相が無いという背理になる。 1

ここで言う。「性相の無いものは有る。」

（それに）説く。

性相の無い事物とは、
何も、何処かに、有るのではない。

「も」という語は、「まさしく」という意味であり、性相の無い事物とは、まさしく何も有るのではなく、如何なる経説にも示されていない。ならば今、

¹ 性相：定義。これに対して被定義項（定義されるもの）を名相という。

² 事相：性相・名相がその上に成立している、拠所となる例。

性相の無い事物が無ければ、
性相は何に当てはまるとなろうか。 2

それは示されるに適う。

性相が当てはまることを否定する > [性相の有無を考察して性相が当てはまることを否定する]

このように、

性相の無いものに、性相は、
当てはまらない。

そのように、何故ならば、性相が無い事物は何も有るのではない故に、性相の無い事物が無ければ、それは、拠所の無いものに性相が当てはまることは不合理である。

『ならば、性相と共にある事物に性相が当てはまることになる。』と思えば。

説く。

性相と共にあるものに（当てはまるの）ではない。

性相と共にある事物においても、性相が当てはまることは不合理である。（何故ならば）必要が無い故である。自らの性相と共に良く成立した事物においても、性相が何をしようか。そう見れば、無限になる背理となり、それは何時でも性相と共にあるのではないとはならず、常に性相が当てはまる背理となるだろう。それも主張せず、そう見るので、性相と共にある事物にも、性相が当てはまることは不合理である。

そこでこう、『性相と共にあるものと、性相が無いものより他に当てはまる』と思えば。

説く。

性相と共にあるか、性相の無いものより、
他にも当てはまるとはならない。 3

何故かといえば、あり得ない故であり、もし性相と共にあれば、性相が無いのではないが、仮に性相が無ければ、性相と共にあるのではないので、それ故に、「性相と共にあり、性相が無い」というそれは、否定として合わないものであり、そう考えればあり得ないのみである故に、「性相と共にあり、性相が無い」他にも、性相が当てはまるとは不合理である。

事相を否定する > [それによって事相を否定したと示す]

性相が当てはまるのでなければ、
事相は合理にはならない。

性相が当てはまるのでないならば、性相の拠所（事相）も合理にはならず、このように、君が性相を具えることから元素が良く成立すると示したけれど、性相を具えるそれも、性相が当てはまらない故に不合理である。それ（性相が当てはまること）が無ければ、君の、性相の拠所（事相）は、何によって成立するに合理となろうか。

虚空の元素において性相と名相を否定する > [性相を否定する]

言う。「それは先ず、性相とは有り、性相が有るので、性相の拠所（事相）も良く成立するとなる。」

説く。

事相が合理でないならば、
性相も有るのではない。 4

ここで、性相の拠所（事相）に依拠して性相となるが、その性相の拠所（事相）も不合理である。性相の拠所（事相）が無ければ、拠所が無い性相が如何様に合理となろうか。そう見るので、性相もまさしく有るのではない。

虚空の元素において性相と名相を否定する > [まとめ]

それ故に、事相は有るのではなく、
性相はまさしく有るのではない。

そのように、何故ならば、一切の様相において考察したならば、性相が当て

はまるとは不合理である故に、性相の拠所（事相）は有るのではない。何故ならば、性相の拠所（事相）が有るのではない故に、無いものの性相も、まさしく有るのではない。

虚空の元素が本性として成立したことを否定する>事物として・無事物として成立することを否定する> [本義]

言う。「『これは性相の拠所（事相）である。』『これは性相である。』と述べることはできないであろうが、しかしながら、先ず、事物は有る。」

説く。

事相と性相以外の
事物も有るのではない。 5

もし、何らかの事物が有るとなれば、性相の拠所（事相）か？性相の何れとなるか？と問えば、性相の拠所（事相）でもないが性相でもないものは、まさしく有るのではない故に、性相の拠所（事相）と性相以外の事物は何ものもまさしく有るのではない。

言う。「事物はまさしく有る。何故かといえば、無事物が有る故である。ここで君達の誰かが、『性相の拠所（事相）と性相は無い。』というそれは、事物に相互関係しているのであり、それ故に『何かの事物は無い。』と述べられるその事物は何か有るので、そう見るので、無事物が有る故に、事物はまさしく有る。」

説明を正しく述べよう。もし、無事物が有るならば、事物も有るとなろうが、無事物が有るのではないので、事物が有ると何処でなろうか。如何様にといえば、

事物が有るのでなければ、
無事物は何のものであるとなろうか。

前述で、

「事相と性相以外の、事物も有るのではない。」

と示したので、その事物が有るのでなければ、君のその無事物は何のものであるかと考察される。このように、事物の事物が無くなるのか？と問えば、その事物も有るのでなければ、その無事物は何のものであるとなろうか。そう見る

ので、事物は無い故に、無事物も無い。

事物として・無事物として成立することを否定する> [反論を斥ける]

言う。「それら、何かの事物と無事物を知り、事物と無事物を分別する者は、
先ず有る。それが有るので、事物と無事物もまさしく良く成立するのである。」

説く。

事物と無事物は合致しない法（現象）である。

何ものが事物と無事物を知ろうか。 6

合致しない法（現象）とは、それらが背反する法（現象）であり、事物と無事物の合致しない法（現象）とは、事物と無事物が合致しない法（現象）である。事物と無事物の合致しない法（現象）とは何かといえば、事物でもないが無事物でもないものである。そこで、もし何かが有るとなれば、事物である法（現象）か？無事物である法（現象）になるか？と問えば、事物である法（現象）でもないが、無事物である法（現象）でもないそれは、まさしく有るのではない。事物と無事物と合致しないその法（現象）が無ければ、何ものがそれら事物と無事物を知ると考えられるのか？そう見るので、事物と無事物であると知ることも無い。

虚空の元素が本性として成立したことを否定する> [諸批判のまとめ]

それ故に虚空は事物ではない。

無事物ではなく、事相ではない。

性相ではない。

そのように、何故ならば、考察したならば性相の拠所（事相）と性相は無く、性相の拠所（事相）と性相以外の他の事物も無い。事物が無ければ無事物も無い故に、虚空とは事物でもなく、無事物でもなく、性相の拠所（事相）でもなく、性相でもない。このように、もし「虚空」という僅かな何かが有るとなれば、それら四つの何れか一つとなるかと問えば、それらの四つとも無いので、それ故に虚空は有るのではない。

六元素が本性として成立したことを否定する> [その正理を残りの元素へも適用する]

・・・・五元素である、
他の何れもが、虚空に等しい。 7

「虚空に等しい。」とは、「虚空と等しい。」であり、虚空を考察したならば事物でもなく、無事物でもなく、性相の拠所（事相）でもなく、性相でもなく、「虚空」とは何ものでもないが如く、それら他の地等の五元素であるものも、事物でもなく、無事物でもなく、性相の拠所（事相）でもなく、性相でもなく、如何なる事物も有るのではないので、それ故に諸元素も有るのではない。

章の著述を説く> [有無の辺見を叱責する]

言う。「ここで、仏陀世尊方が法を示されたことは、概ね蘊と界（元素）と處に依拠している。しかし、そこでもし蘊と界（元素）と處がまさしく無いのであれば、それらは無意味そのものとならないか？それらはまさしく無意味であることが正しくなければ、どのようなものか？」

説く。吾輩は蘊と界（元素）と處が、まさしく無であるとは言わないが、それらが有そのものであるということを排除する。その二つとも過失が大きく、このように後述においても、

「有るとは恒常であると捉える。無いとは断滅と見る。それ故に有と無に、賢者は留まることをするな。」³

と記された。世尊も、

「カタヤナよ。この世間は二つに留まり、概ね実在と、虚無に留まる。」と御言葉を賜れた。

それ故に吾輩は、縁起生であるので、実在と虚無の過失と離れ、断滅でなく恒常ではないと（教えに）沿って良く示し、虚無であるとは言わない。そう見るので、我々にとって、蘊と界（元素）と處に依拠した諸々の教法は、まさしく無意味とはならない。

小心者で、諸事物を
有無そのものであると
視る者達は、視られる対象が
熄滅した寂靜を見ない。 8

³ 「有る…するな。」：『根本中論』第15章10偈。

小心者は最高に深甚である縁起生を了解していないので、諸事物をまさしく有であるか、無であるかと視て、断滅か恒常であると見解する。それによって知恵の眼が覆われた彼らが、視られる対象が熄滅し、寂滅である涅槃を見ることはない。それ故に、正しくありのままに見ていない戯論を愛好する心意を具えた、彼らの蘊と界（元素）と處に依拠した教法は、まさしく無意味になるだろう。然れば、これが勝義であるので、恐れるな。

言う。「何故、虚空の元素であるものを最初に考察したのか？元素を示すに当たり、（世尊は）第一に地の元素を示されたので、まさしく地の元素が、第一に考察されるべきである。」

説く。公認された意味によって、公認されていない意味が良く証明される一世間は概ね、虚空を何ものでもないと信じている。このように或る言説者達は「それら一切の戯論は、虚空である。」と言うので、『それら一切は何ものでもない。』と思惟する。それ故に、「残余の五元素も、虚空と等しく述べたまえ。」と例を示す為に、虚空は空性であると成立したことを第一に示した。

界（元素）に法我を否定する＞ [章の名を示す]

「界（元素）を考察する」という第五章である。